

これまでの 主なできごと



住民フォーラム
「津波について考えてみんげえ」
平成23年(2011)年10月、中学生がこれまでの取り組みを紹介したほか、金沢大の青木賢人准教授による講演も。約140人の住民が参加しました。



小木地区防災訓練
定期的に津波防災訓練を実施するほか、年1回大規模な地区防災訓練を実施しています。初の訓練は平成23年10月に実施し、500人が参加。翌年の訓練は800人が参加しました。



被災地に小型船寄贈
平成24年(2012)年11月、内浦商店連盟の協力を得て、使用されていなかった小型の船2隻を生徒が再塗装。岩手県大槌町の新おおつち漁協に贈りました。

小木中学校「つなぐプロジェクト」

「地域と小木中」をつなぐ

お年寄り、保育園児などと普段から交流をもち、生徒が防災の担い手として力を発揮できることを目指す。

「東北と小木中」をつなぐ

復興に向けて心を寄せるとともに、被災地の現状を日ごろの訓練に生かす。

「地域と地域」をつなぐ

他の地域と普段から文化交流し、いざという時に避難を相互に受け入れる。

何を つなぐ プロジェクト?

「つなぐプロジェクト」と名づけられたこの取り組みは、授業を利用して行われる防災学習です。震災の翌年、平成24年度から本格的に開始しました。

大人たちや高校生が通勤や通学で地域を離れる間、中学生たちが地域防災の担い手として活躍できるよう、普段から備えるものです。

一つ目の「地域と小木中」を「つなぐ」具体的な活動は、保育園での防災ダンスなどを通じた交流やお年寄りとのグループ交流などです。避難の誘導や避難所運営

がスムーズに行えるよう、意思疎通に努めることを目指しています。

二つ目の東北地方のつながりでは、被害と復興の状況を目にする事によって、訓練や避難のあり方を探るものです。

三つ目、津波や土砂災害など、広域災害が発生した場合は地域間の助け合いや避難が不可欠です。日ごろから文化交流などで「地域と地域」の間で関係作りしておくことで避難生活を安心して送ることができます。

生徒が地域住民の一員として自覚し、自分の力で地域を支えることで、自信につながること期待しています。



【写真上】社会福祉協議会主催の「防災・減災セミナー」で取り組みを紹介(平成24年2月)
【左下】小学生に新聞紙で作る防寒着を指導 【右下】訓練の参加について聞き取り

つなげ 命のバトン

震災から3年。小木中学校「つなぐプロジェクト」の現在

「震災を忘れない」
今も続く小木中の
防災の取り組み

平成23年3月11日午後2時46分―日本を突如襲った強い揺れと、それによってもたらされた大津波。多くの人が新年度に向けて希望を抱いていたそんな日常を、東日本大震災は非情に引き裂きました。大震災から今年で3年8カ月が経過します。

「小木から絶対に犠牲者を出さない」と強い決意で始まった小木中学校の防災の取り組みも、同じく3年の月日を経ました。今年2年生が小木地区自主防災組織とともに修学旅行で東北地方を訪問するなど新たな一歩を踏み出しました。

地域と一緒に活動し、災害への備えを訴え続ける生徒たちの姿を紹介します。

東北の思いを「つなぐ」

大川小で遺族の 思いに触れる

9月3日から5日にかけて、2年生18人は修学旅行を実施しました。東京スカイツリーや国会議事堂など、定番のコースに加え、今年初めて被災地を訪ねました。

4日午後には多くの児童が犠牲になった石巻市立大川小学校を訪れました。慰霊台に献花したあと、当時小学6年生だった娘、みずほさんをなくした中学校教員の佐藤敏郎さん、かつらさん夫妻から思いを聞きました。敏郎さんは、「犠牲者と同年代の中学生、高校生が来てくれるのはありがたいこと」と話しました。震災による大きな揺れから津波到達まで51分の時間がありながら、児童は高台へ避難できず、津波にのみ込まれたことが「大川小学校事故検証

報告書」に記録されています。

敏郎さんは「みなさんは犠牲になった子どもと同年代です。もしあの時助かっていれば、子どもたちは中学校の制服を着ているはずですが、次から次に子どもの遺体が運ばれてくるような光景は、二度とあつてはなりません」と生徒たちに呼びかけました。

「今回の津波で亡くなった人は生きるか死ぬか紙一重なんです。だから今生きているということは『おまえらまだ生きる』と言われている、生かされているということだと思います。『生きて役割を果たせ』と私たちは言われています。誰が悪いのかと言う問題ではなく、何か原因があつたはず。黒い波がやってきたとき、先生たちも後悔したはず。亡くなった人たちの命の意味を考え、未来につなげるのが役割だと思っています。」敏郎さんは思いを語りました。

「自分を大切に、一生懸命生きることが
良い日本につながります」

—佐藤かつらさん



かつらさんも震災当時は中学校の教員でした。内陸部の学校に勤務していて、震災対応にあたっていたため直後に帰宅することはできませんでしたが、学校で先生と一緒にいる時間帯であつたため、娘のみずほさんの安全を信じていました。地震による津波が確実にやってくることから、宮城県では学校現場で子どもたちを守るため、マニュアルや訓練などあらゆる準備を調えるように指導されています。「先生だけに頼っているのではなく、みんなで協力して、命を守ることに真剣に取り組んでほしい」と話しました。

「この場所に来るたびにうれしいです。でもみんなに会えて良かったと思います。娘が生きていれば高校生です。まさか家に帰って来ないなんて想像もしてませんでした。



元気に学校に行つて、元気に帰ることが当たり前だと思つていました。震災を経験して、あすには何が起きるかわからないということを、身をもって痛感しました。みんなは可能性がある人たちなので、一日一日を大切に、自分を大切に生きていってほしいなと思います。一生懸命生きることが良い日本を作ることにつながります」と、かつらさんは生徒たちにエールを送ってくれました。

「亡くなった人たちの命の意味を考え、
未来につなげるのが役割」

—佐藤敏郎さん

避難生活を経て ようやく帰れた日常

5日には石巻市立湊中学校の代表10人と交流を行いました。小木中は能登の方言や防災活動を紹介しました。グループワークでは、湊中の生徒から、被災から現在までの体験や思いが語られました。「この近くに住んでいます。津波でがれきもいっぱいあつたけど、全国、世界中からボランティアが来てくれて、こんなに片付きました。私たちがいまここで勉強できているのも皆さんのおかげです。」そう話した生徒は、最近ようやく自宅が完成し、避難所から引越しました。

いま中学3年生の生徒は、小学6年の1年間を仮設校舎で過ごし、中学校も2年間は仮の校舎。湊中学生は今年の3月にやっと、今の校舎に帰ってくる事ができました。帰ってきた喜びのためか、どの生徒も明るい表情を見せてくれました。



「私たちがいま勉強できるのは
皆さんのおかげです」

—湊中学校生徒



震災当時の様子を話す佐藤敏郎さん（中央）とかつらさん（右）

世代間を「つなぐ」

地域と連携

中学生の力

小木地区には高校がないため、地域外で勤務する大人に加え、高校生も通学で昼間は地域を離れます。子どもと年寄りが多いこの地域で災害が発生した場合、中学生が防災の担い手として不可欠になります。

岩手県釜石市では群馬大学大学院の片田敏孝教授が防災に携わり、中学生が「助ける立場」として活躍するように備えられました。震災の際も中学生の手に引かれ、多くの人が助かりました。しかし震災前の訓練の際に「逃げられないからあきらめる」と参加しないお年寄りや、手を引かれて泣き出す子どもなど、スムーズに避難できない事態が

発生。日ごろから地域との交流を持つ重要性が指摘されました。小木中学校では、劇の上演や防災の歌、ダンスを通じて子どもや高齢者との交流を促しています。10月2日には1年生が地元のグラウンドゴルフクラブと、プレーを通じて交流しました。「顔や住んでいる場所は知っているけど、話したことはない」という高齢者と打ち解けることが目的です。話をするきっかけ

として、これまで地区での訓練についての聞き取りや、訓練参加の呼びかけも実施しました。保育園児とは、歌やダンスを交えた防災劇で交流しました。津波避難「3つのおきて」を盛り込み防災についても学んでもらいます。平成24年には現在の3年生が「防災の歌」を制作。ジェスチャーを交えて地震発生時の対応をわかりやすく紹介しています。この防災の歌は進化を続けています。ことし9月、北陸学院大学の学生6人が中学校を訪れ、生徒と共に防災の歌

の振り付けを行いました。学生は同大の被災地支援「よりの花プロジェクト」に参加しています。防災の歌をお年寄りに覚えてもらえるような体操にすることが目標です。幼児児童教育学科で学んだ大学生の知恵で中学生のアイデアを生かしました。完成した「防災体操」は11月24日に実施する地区の防災訓練で披露されます。



防災ダンスの振り付けは班ごと実施。考案した振り付けをお互いに確認しあって完成にこぎつけた。(9月17日)

今回の防災訓練では新たな取り組みが始まります。これまでの訓練では町内会単位で中学校か小学校のどちらか近い方に避難することに決められていました。しかし、同じ町内会の中でも、危険な場所を通らないと避難場所にたどり着けない家や、別の避難場所が近い場合があります。そこで今回は各町内会に2〜3カ所ずつ、高台に一次避難場所を設け、9分以内に入ったん避難することになりました。事前にどの避難場所に逃げるのかを家庭ごとに決めてもらいました。

この取り組みは昨年の訓練を受け「より現実的な避難を」と金沢大学の青木賢人准教授から出された宿題です。避難場所の下見は3年生が行いました。自分の住む町内で、避難路を実際に歩いて危険箇所を調べ、注意すべき点を整理しました。どの避難場所にも逃げるのかということと一緒に、リストを作成して避難訓練の際に活用します。



グラウンドゴルフでは生徒から「楽しかった」という感想が。(10月2日)



柳田中学校と一緒にとも旗祭りを体験。友情を深めた。(5月2日)

秋にはブナ林が広がる鉢伏山に登り、山と共生してきた昔の人の営みを学びました。生徒たちはお互いに地区を行き来し、海の文化と山の文化をそれぞれ学んでいます。平成25年1月には紙すきを体験。世界に一枚だけの卒業久田和紙の証書づくりに挑戦しました。地区に伝わる久田和紙を保全している「みわ会」会員から、伝統継承に対する思いや苦労など、いろいろな話を聞くことができました。これが契機となり、翌年度には卒業証書づくりの対象が能登町の全中学校に拡大。交流の輪がより大きくなりました。

きない里山の営みです。他の地域で受け継がれてきた異なる文化を学ぶことで、自分が住む地域のすばらしさに気づき、地域への愛情が生まれます。さらに地域内の交流が進み、良い循環が生まれます。



小木中学校 大句わか子校長

異なる文化を学び 地域により愛着を

大規模災害が発生した場合、小木地区内だけでは避難者を受け入れることができません。住み慣れた地区を離れ、避難生活を送ることは大きなストレスになります。そこで小木中学校では小木地区以外のひととの交流も積極的に行っています。普段から文化が異なる離れた地域と交流を深めていると、発生した災害に応じて、相互に助け合うことができます。

交流は平成24年に始まりました。山間部の柳田中との「とも旗祭り」が最初です。柳田中生徒はとも旗作りの工程にも一部参加し、小木地区の町内会の人の指示を受けながら



鉢伏山ブナ林では、木を探すゲームで交流。(10月2日)

五十里では、農家の谷口幸雄さんの協力を得て、水田での体験作業も始まりました。米を乾燥させる「はぎ」を組み立て、鎌で刈り取った稲をかけました。小木では体験で



先輩が植栽した和紙原料「コウゾ」を刈り取った(10月23日)

小木地区津波避難訓練

11月24日(月) 9:30～

防災告知放送で訓練開始をお知らせします。高台の第一次避難場所に避難し、その後小木小学校で金沢大・青木賢人准教授の講演会などを実施します。

防災の取り組みが日常のものになり、教員も慣れてきました。しかし、1年生の中には、自分たちの活動にどのような意味があつて、どれだけ大切なものなのか理解しないまま活動している様子も見られるようになりました。そこで今年度は、DVDや写真で先輩が行った取り組みを振り返り、活動の目的を学んでもらう機会を設けました。避難の誘導を受ける小学生当時の自分の姿を映像で見て、活動がどのような意味を持つのかについて考えてみてください。防災は自分から気づき行動し、継続していくことが大切です。11月24日の防災訓練で生徒がどのような活躍を見せるのか、他の地域の防災関係者にも見ていただきたいと思います。

地域同士を「つなぐ」